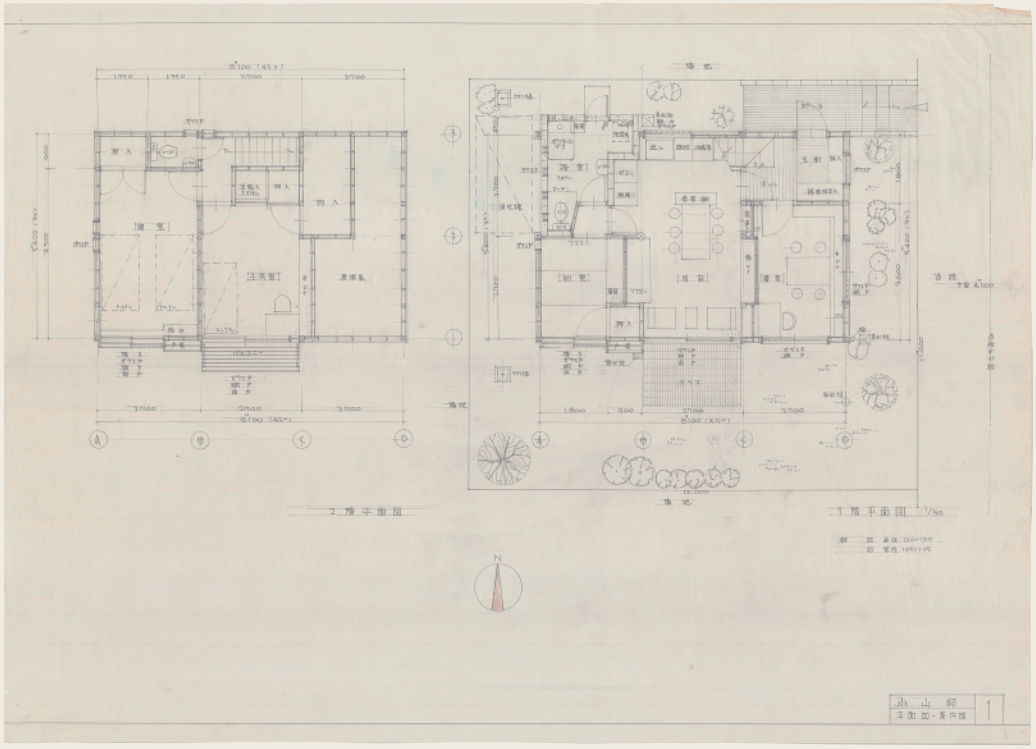
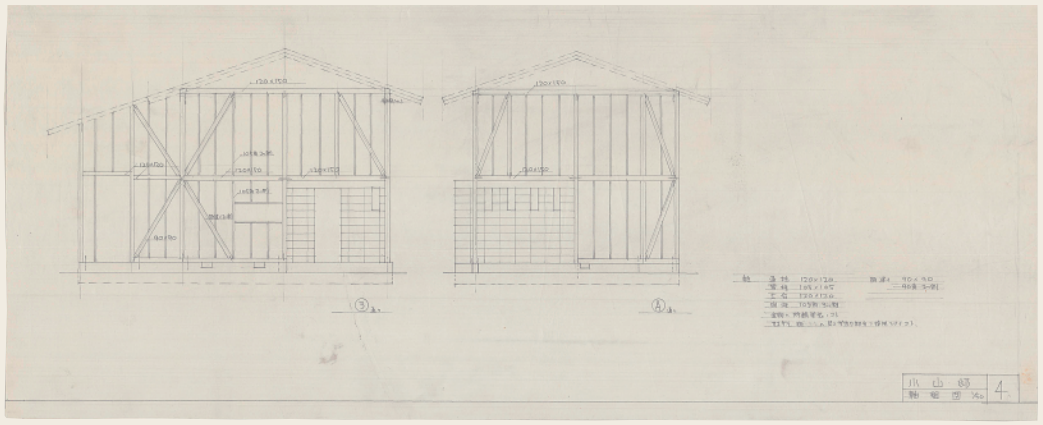
竣工時（1964年頃）の原図



平面図



軸組図

増築を想定した当時の平面

左２点は「小山邸」とあるが、「感泣亭」の竣工時の図面。生田勉の図面は、もともとは生田家が保管していたが、現在は金沢工業大学建築アーカイヴス研究所に所蔵されている。

生田は、友人や親戚の設計を手がけてきたため、豪邸というよりは予算に制限のある住宅作品が多い。そうした住宅に対し、生田は後の増築を想定したプランニングをしている。たとえば、敷地の周囲に余白をつくることにより、周囲への増築を可能にしている。そのプランニングを、生田の自邸「牟礼の家」でも、この「感泣亭」でも実施している。

原図を見ると、まず南側に大きな庭が確保されているほか、東側や西側にも若干の余白がある。この東西の余白には、Eurekaと三浦清史さんが携わる以前から、すでに増築がなされており、書斎や和室が拡張されていた。Eurekaと三浦さんは、南側の増築を担ったのである。「牟礼の家」でも増築が進んでおり、生田の想定どおりになっている。

また浴室まわりの壁はコンクリートブロックである。これは水まわりの防水性や、台所の防火性への配慮だと思われるが、増築時や設備更新のときに、再構成しやすい材料選び。